

2.1 媛っこ地鶏母鶏の能力検定

養鶏研究所 岸本勇氣、難波江祐介

1 諸言

養鶏研究所が開発し平成15年から市場出荷がはじまった「媛っこ地鶏」は、平成23年に6万羽が出荷され、平成24年にはテレビの料理番組でも紹介されたことなどから全国での知名度が高まり注文が増加し、県外への出荷は総生産のうちの約20%を占めるに至っている。

媛っこ地鶏の供給羽数はマスメディアの活用やイベント等で積極的に販売促進運動等を実施していることから、今後も需要が大幅に増えることが見込まれ、7年後には媛っこ地鶏開発当初の目標である12万羽を達成を目指しており(図1)、その効率的体制を確立するためには、施設整備とあわせて、産卵率の悪い伊予路しゃも(媛っこ地鶏母鶏)(図2)の種卵生産能力の向上が理想である。そのためまずは、伊予路しゃも母鶏の能力を把握するため、国が生産している有色卵鶏二元交配種と比較することにより効率的な改良方向を策定することで、伊予路しゃもの産卵率を向上させ、安定かつ効率的に媛っこ地鶏の雛を生産していく必要がある。

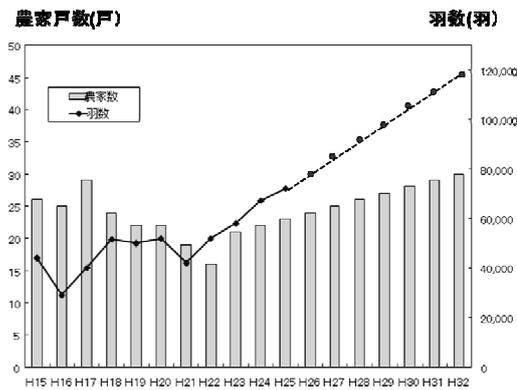


図1 媛っこ地鶏の生産状況と今後の見込み
*26年度以降の点線は、H21から24年までの年伸び率の平均

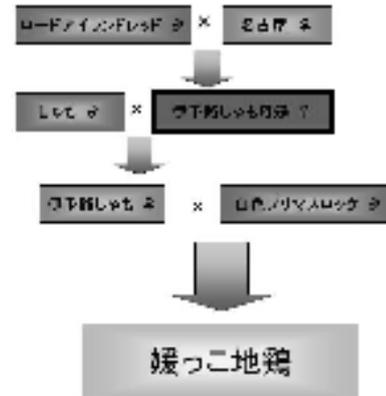


図2 媛っこ地鶏の系譜

2 材料および方法

(1) 供試鶏及び羽数

表1 供試鶏及び羽数

供試鶏	組合せ(♂×♀)		羽数
	雄	雌	
母鶏	ロードアイランドレッド	名古屋種	250
卵肉兼用種	横班プリマスロック	ロードアイランドレッド	250
卵用種A	ロードアイランドレッド	白色プリマスロック	250
卵用種B	白色レグホーン	ロードアイランドレッド	250

(2) 試験期間

平成21年5月13日～平成22年8月4日(448日間)

平成22年5月12日～平成23年8月3日(448日間)

平成23年5月12日～平成24年8月3日(448日間)

(3)調査項目

表2 調査項目

項目	調査期間
育成率	1～21 週齢
生存率	21～64 週齢
体重	20、36、43、64 週齢
産卵率	21～64 週齢
飼料消費量	21～64 週齢
飼料要求率	21～64 週齢

3 成績

(1) 育成率・生存率(3年間平均)

1 週齢から 21 週齢までの育成率は、母鶏が 97.5%、卵肉兼用種が 97.4%、卵用種 A が 96.1%、卵用種 B が 98.9%であった。また、21 週齢から 64 週齢までの生存率は、母鶏が 93.4%、卵肉兼用種が 90.4%、卵用種 A が 83.6%、卵用種 B が 85.9%であった。(図 3)。

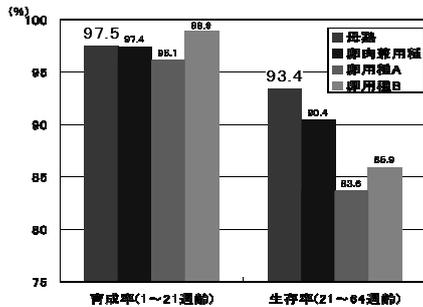


図3 育成率・生存率(3年間平均)

(2)体重(3年間平均)

体重は、全ての鶏種において 43 週齢目まで体重が増加し、その後、横ばいからやや減少する傾向で推移した。64 週齢時の体重は、母鶏が 2614.8g、卵肉兼用種が 2406.4g、卵用種 A が 2134.9g、卵用種 B が 2105.3g であった(図 4)。

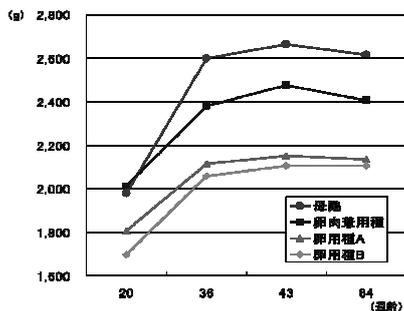
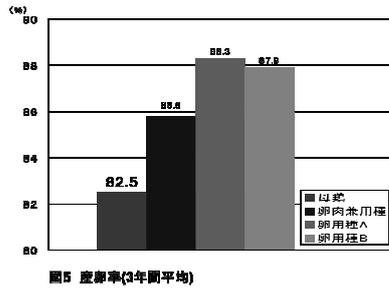


図4 体重(3年間平均)

(3)産卵率(3年間平均)

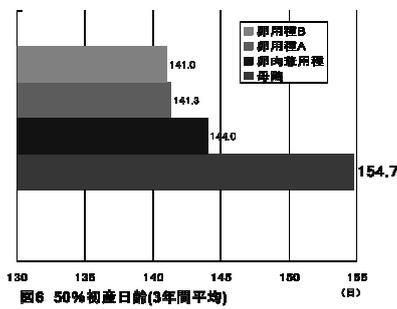
産卵率は、母鶏が 82.5%、卵肉兼用種が 85.8%、卵用種 A が 88.3%、卵用種 B が 87.9%であった。

(図 5)



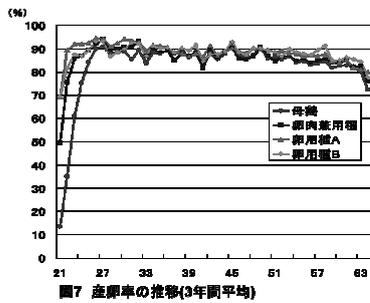
(4)50%初産日齢(3年間平均)

50%初産日齢は、母鶏が 154.7 日、卵肉兼用種が 144.0 日、卵用種 A が 141.3 日、卵用種 B が 141.0 日であった。(図 6)。



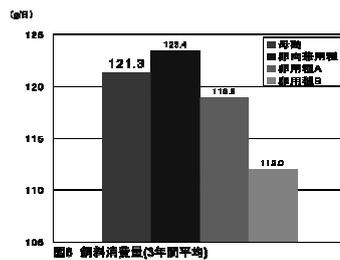
(5)産卵率の推移(3年間平均)

産卵率のピークは、母鶏が 45 週齢、卵肉兼用種及び卵用種 B が 27 週齢、卵用種 A が 26 週齢であった(図 7)。



(6)飼料消費量(3年間平均)

飼料消費量は、母鶏が 121.3g、卵肉兼用種が 123.4g、卵用種 A が 118.9g、卵用種 B が 112.0g であった(図 8)。



(7)飼料要求率(3年間平均)

飼料要求率は、母鶏が 2.39、卵肉兼用種が 2.37、卵用種 A が 2.13、卵用種 B が 2.05 であった(図 9)。

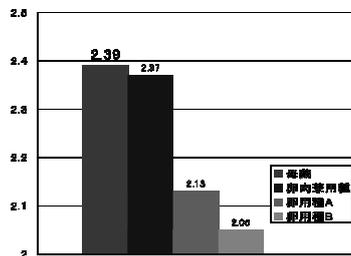


図9 飼料要求率(3年間平均)
*飼料要求率:1kgの卵を生産するのに必要な飼料量

4 考察

試験結果は伊予路しゃも母鶏の育成率は 97.5%で他の 3 鶏種と同等程度で、生存率は 93.4%で他の 3 鶏種に比べて 3%から 5%強健性には優れているものの、産卵率は 82.5%と他の 3 鶏種に比べて 3%から 6%悪い結果となった。これは、50%初産日齢が 154.7 日齢と他の鶏種に比べて約 10 日遅いため、産卵率のピークが約 20 週齢遅れていることが起因しているものと考えられた。

以上のことから、伊予路しゃも母鶏の 50%初産日齢の早期化及び産卵率を向上させ、伊予路しゃも母鶏の産卵能力の向上を図り、安定して良質な媛っこ地鶏の種卵を生産していくことで媛っこ地鶏の雛の安定供給及びブランド力の向上を図りたい。

そのため、今後は伊予路しゃも母鶏の交配原種鶏であるロードアイランドレッド及び名古屋種の選抜交配により、50%初産日齢の早期化を重要目標の一つとして改良を進め、しゃも母鶏の改良について併せて検討する。